

A Study of the Japanese Compound Case Marker *Ni Totte* by Examining Its Difference in Use with *Meiwaku* and *Shitsurei*

Yukiko Muramatsu

Abstract

In this paper, I examine whether expressions with the Japanese compound case marker *ni totte* are acceptable with the two Japanese words *meiwaku* and *shitsurei*. In the case of *meiwaku*, sentences with *ni totte* are natural, for example, *Kare ni totte meiwaku da*. However, in the case of *shitsurei*, sentences such as *Kare ni totte shitsurei da* are not acceptable. In the sentence *Kare wa shitsurei da*, because *kare* is an agent who performs a rude act, he cannot be at the receiving end of the act, as would be implied by *kare ni totte*. However, when an expression with *ni totte shitsurei* has an adnominal structure, *kare* can be the receiver. In this case, it is possible to frame a sentence from his standpoint, even with *shitsurei*, for example, *Kare ni totte shitsurei na hanashi datta*.

複合格助詞「にとって」に関する一考察

－「迷惑」「失礼」を例にして－

村 松 由起子

1. はじめに

複合格助詞「にとって」は、日本語学習者が誤用を産出しやすい表現の一つであり、実際に次の(1)～(4)のような誤用例が見られる。〈 〉は学習者の出身国である。

- (1) *日本人で靴とは単なる履く物でしかない。〈スリランカ〉
- (2) *その祭りはラオス人に対してとても楽しい祭りである。〈ラオス〉
- (3) *私に対して、日本語を勉強することは一番面白いことであります。〈中国〉
- (4) *中国人の留学生に対して、日本語を勉強することは易しいが、そんな便利な面があるからこそその落とし穴もあるのです。〈中国〉

下線の部分はすべて「にとって」を用いるべき箇所であり、(1)は「日本人にとって靴とは単なる履き物でしかない／単に履く物でしかない」、(2)(3)(4)は「ラオス人にとって」「私にとって」「中国人の留学生にとって」とすべきところである。中でも(2)(3)(4)のように、「にとって」を使うべきなのに「に対して」を使ってしまう誤用にはしばしば遭遇する。

また、次の(5)のように、「にとって」と「に対して」の使い分けがわかりにくい場合もある。(5)では、a「迷惑」の場合は「にとって」が使用できるのに対して、b「失礼」の場合は「にとって」は使えず、c「に対して」を用いる。

- (5) a. 彼にとって迷惑だ。
* b. 彼にとって失礼だ。
c. 彼に対して失礼だ。

では、なぜaの「迷惑」は「にとって」が使え、bの「失礼」は使えないのか。

本稿では「にとって」の用法について、先行研究で明らかにされている意味、用法を確認しながら、(5)の「迷惑」「失礼」の場合を例にして、「にとって」の使用上の制約を考察していく。

2. 先行研究

まず、「にとって」が一般的にどのように説明されているのかを見ておく。

森田・松木（1989）では次のように説明されている。

判断や評価を成立させる立場・視点を示す表現で、“～の身から見て”の意で主に人物を受ける。稀に無生物も受けるが、擬人法などの特別な場合や、“～を中心として考えると”の意で何かの事物に視点を移してながめた場合に限られる。また、元の動詞「とる」が、他の事物を自己側に引き入れる行為を示すところから、「にとって」は受け手としての立場・視点を表す意識が強いと言えよう。

つまり、「にとって」の特徴は、行為の受け手の立場・視点から述べる表現だという点である。また、具体的な使用上の制約については、杉本（2006）、宮田（2009）などの先行研究によって、より詳細な考察が行われている。ここでは日本語教育的な立場からの説明を試みている宮田に触れておく。宮田は「教室で学習者に簡便かつ必要十分な説明を提示することを目標にして、「にとって」の基本的意味と構文的制約の記述」を行っており、「にとって」の基本的意味を「経験者がXである場合を適用範囲として、「AはBだ」という判断を行う。（＝「少なくともXの場合は、「AはBだ」と言える）」とし、「Xの場合は言えるが、X以外の場合は関知しない」という条件づけのしかたを「留保」と呼んでいる。そして、先行研究で指摘されている制約を以下の(A)(B)(C)にまとめた上で、「Xにとって」が“少なくともXの場合は”という留保の表現であることを学習者に理解させておけば、(A)～(C)に反する文を作る可能性は自然に低くなる」と述べている。

(A) 「AはBだ」の< - 普遍性 >

(B) XとAの密接さ

(C) Xの対比性

また、これら以外にも一つ構文的制約が働いている場合を挙げ、その制約について「X（経験者）を必須成分とし、「XはA {が／に} B」という文型をとる述語がBの場合、「Xにとって、AはBだ」は使いにくい」としている。次の(6)は宮田の例文である。

(6) *中国人にとって、納豆は嫌いです。

宮田は「中国人は納豆が嫌いだ」のように「Xは(が)AがBだ」という文型をとり、経験者格「Xは(が)」を必須成分とする述語では、「XはA {が／に} Bだ」と言えば済むので、「にとって」を持ち込む必要はない、としている。

確かに、(A)(B)(C)は「にとって」をあえて付加することによって生じる意味だとする宮田の説明は端的であり、学習者にとっても理解しやすいと思われる。その一方、学習者が実際に「にとって」を用いる運用面から考えてみると、学習者の母語の影響なども関わってくるため、「にとって」の意味は理解しているにも関わらず、誤用を産出してしまう場合もある。以下、母語の影響に関して中国人学習者の場合を例に述べていく。

中国人学習者には、冒頭の(3)(4)のように、本来「にとって」を使うべきなのに「に対して」を使ってしまうという誤用が目立つ。この、中国人学習者が「にとって」「に対して」を混同させやすい要因については、張(2001)が日中対照の視点から説明している。(7)は張の例文である。

(7) 私に対してはこれは簡単だよ。

張は「にとって」に相当する中国語の言い方として「对」、「对～来说」、「对于～来说」などの3種類があり、「に対して」に相当する中国語の言い方としては「对」、「对于」の2種類があることを述べた上で、混同しやすい理由について、「「にとって」に相当する中国語の言い方も「に対して」に相当する中国語の言い方も「对」か「对+アルファ」なので、中国語を母語とする学習者には「に対して」に用いられている漢字の「对」が自国語表現の中に見られる「对」との同一性によって強く印象付けられています。そのために、日本語として「にとって」を使うべきところも「に対して」を使うべきところも、「に対して」を使ってしまうということが起こっているのです。」と説明している。次の(8)(9)(10)も張の例文である。例文中の下線は張による。

(8) 「そう羨ましがるな」

関川は、和賀のほうへは背中を向けて離れていた。

「当人にとっても迷惑な話だ」(砂の)^{注1}

“你别那么眼红。”

关川背向着和贺走开、

“对他本人这也是个负担。”

(9) 捜査上、詳しいことはちょっと申しあげかねますが、われわれにとっては、重大なんですよ。(砂の)

(由于侦查上的原因我不便详谈。这事对我们来说是十分重要的。)

(10) 君、関川が急に和賀英良の音楽に対して好意的な批評をはじめたのを気づいただろう。

(你注意到了吧？关川对和贺英良的音乐作品突然开始进行善意的评论了。)(砂の)

下線部「にとって」を見ると、(8)は「对」に、(9)は「对～来说」に対応し、また(10)では「に対して」と「对」が対応しており、対応関係が単純でないことがわかる。(8)(10)は、中国語はともに「对」を用いて表現されているのに対し、日本語は「にとって」「に対して」と異なる表現を用いていることから、中国人学習者にとってはこの二つの表現は混乱しやすいことが推測される。

一方、日本語との対照ではなく、中国語のみから見た場合にも「对」、「对～来说」、「对于～来说」と「对」、「对于」は混同しやすいとの指摘もある。

北京大学中国語言文学系現代漢語教研室(松岡・古川監訳)(2004)^{注2}では「对于」「对」に関する誤用例が解説されているが、その中に「A对于B来说～」を使うべきところに「A对于B～」[AはBに対して…だ]を使用している誤用についても述べられている。次の(11)は「誰が誰に対するのか」が逆になってしまった例だという。

(11) 贾平凹对我们并不陌生。他是位年轻多产的作者……。[* 贾平凹はわれわれについてよく

知っている。彼は若くて作品の多い作家であり…→賈平凹はわれわれにはよく知られた作家である。彼は若くて作品の多い作家であり…。]

なお、(11)の日本語訳は「われわれにとって」ではなく「われわれに」となっているが、ここでは中国語の「A对于B来说～」[AはBにとって…だ]を使うべきところに「A对于B～」[AはBに対して…だ]を使う誤用がある点のみに注目し、日本語の「にとって」と「に」の違いについては触れないでおく。

この(11)については、「最初の一文を読む限りにおいては、賈平凹が“我们”のことをよく知っているのかと思いきや、実はその逆であることが続きを読んで分かるのである。“賈平凹”と“我们”を入れ替えるか、“我们”の後に“来说”を加えるべきである。注意を要するのは、“A对于B～”[AはBに対して…だ]と“A对于B来说～”[AはBにとっては…だ]とでは意味が正反対になるということである」と説明されている。つまり、中国人日本語学習者にとっては日本語の「に対して」「にとって」を誤りやすいだけでなく、そもそもこれらに該当する中国語「A对于B～」「A对于B来说～」についても誤用が生じている可能性もありうるのである。なお、以下、本稿では張の表記に倣って「A对于B来说～」式ではなく、「对于～来说」式で記載していく。

また、次の(12) a「在～眼中」ように、「にとって」が「対」「対～来说」「对于～来说」以外で表現される場合もある。さらに、bの「ほくらにとって」は「对于～来说」ではなく、「对于」によって訳されている。cの「ほくには」は「ほくにとっては」と置き換え可能だが、cでも中国語には「对于」が使用されており、「对于」と「にとって」が対応するケースに準じている。

(12) a. あのイタリア婦人にとっては、日本人が坐りさえすれば、それが座禅なのだ。(日常)

在意大利妇女眼中、日本人的跪坐、无异于坐禅。

b. 受信装置をつくりはじめたころには、ほくらにとってフィリッピンからの短波放送をとらえるほかなかったのが、…(略)(日常)

开始安装的接收装置、起初、对于我们除可以接收来自菲律宾的短波广播外、别无他用、…(略)

c. 犀吉はその詩をかれ独特の甲高い吃りがちの調子で、しかしほくには充分美しく感じられるやり方で二度くりかえした。(日常)

犀吉以他独有的尖锐而常带口吃的语调、可对于我却能带来美的感受的读法、把那首诗念了两遍。

以上、実際の用例、誤用例を見てみると、中国人日本語学習者にとって、「にとって」「に対して」を中国語との対応から区別しようとするのは簡単ではないことがわかる。また、「にとって」に関する誤用は中国人学習者以外にも見られるので、なぜ誤用が生じやすいかについては、母語との対照、基本的な用法、使用上の制約など多角的に考察してみる必要がある。

以下、本稿では「にとって」に関する一考察として、冒頭の「迷惑」「失礼」を例に誤用が生じやすい要因を検討していく。

3. 「迷惑」「失礼」の場合

次の(13)は(5)の再掲である。

- (13) a. 彼にとって迷惑だ。
*b. 彼にとって失礼だ。
c. 彼に対して失礼だ。

(13)のように、「失礼」の場合は「にとって」を使うと不自然になり、「に対して」を用いる。この「迷惑」と「失礼」を用いた表現に見られる違いはなぜ生じるのであろうか。まず、語彙的な意味を確認するため、新明解国語辞典第6版の説明を見ておく。「迷惑」「失礼」はともに形容動詞であり、「する」動詞になる点で共通している。意味は「迷惑」が「その人のした事が元になって、相手やまわりの人がとぼちちりを受けたりいやな思いをしたりする△こと(様子)」、「失礼」が「相手に対して、礼儀に反する言動をする△こと(様子)」(△は説明用記号であり「または」を示す)とある。この説明を参考にすると、「迷惑」はいやな思いをする側すなわち受け手側からの、「失礼」は礼儀に反する言動をする側すなわち行為者側からの表現だと考えられる。

次の(14)を見ると、この立場の違いがより明確になる。

- (14) a. 迷惑する。(話し手など主体が迷惑を受ける)
b. 失礼する。(話し手など主体が失礼な行為を行う)

つまり、「迷惑」は行為を受ける側からの表現であるのに対して、「失礼」のほうは行為者側からの表現になる。これは(15)のような言い方にも表れる。

- (15) *a. 迷惑な!
b. 失礼な! (「失礼なことを言わないで」の意味で発言)

a「迷惑な!」が成り立たないのは迷惑だと感じる主体が話し手であるため、相手の動作・行為に対して「～ないで」と命令を意図した表現であるaは不自然になるからであろう。一方、「失礼」は失礼なことをする主体が相手であるため、b「失礼な!」のように、相手に対して「～ないで」と命令を意図した表現が可能になるのであろう。

ところが、次の(16)のように、連体修飾にすれば「失礼」の場合でも「にとって」の使用に不自然さを感じなくなる。

- (16) a. 彼にとって迷惑な話
b. 彼にとって失礼な話
c. 彼に対して失礼な話

ではなぜ(16) b「失礼」は「にとって」を使用しても不自然さが感じられないのであろうか。

- (17) a. それは彼にとって迷惑な話だ。
? b. それは彼にとって失礼な話だ。
c. それは彼に対して失礼な話だ。
(18) それは彼にとって失礼な話だった。

(17) b は不自然さが感じられるものの場合によっては言えるであろう。また、(18) は小説などであれば不自然さは感じられないであろう。(17) は発話時における話し手の判断を述べており、話し手が彼の視点からは述べにくい状況であるのに対して、(18) は「だった」と過去にすることで、「彼がそのことに対して失礼だと感じた」ことを客観的に判断しやすくなり、第三者であっても彼の視点から表現しやすくなるため、不自然さが感じられなくなるのだと考える。

このことから、「～の身から見て」述べることができる状況が整えば、本来「に対して」を用いて表現する文であっても「にとって」の使用が可能になる場合があることがわかる。

さらに、次の (19) の例を見てみたい。

(19) a. 太郎は次郎に対して失礼なことばかりする。

? b. 太郎は次郎にとって失礼なことばかりする。

(19) b は次の (20) ように、文の構造の捉え方によって、許容の度合いが異なってくる。(19) b は文の構造から見ると、次の (20) a、b のように 2 通りの捉え方が可能である。なお、違いがより明確になるよう、b の下段は語順を変えて示してある。

(20) a. 太郎は、次郎にとって失礼なことばかりする。

太郎は [次郎にとって失礼なこと] ばかりする。

*b. 太郎は次郎にとって、失礼なことばかりする。

次郎にとって [太郎は失礼なことばかりする。]

(20) の場合、a は成り立つが、b は不自然である。つまり、どちらの捉え方をするかによって、文としての自然さが異なってくる。a の捉え方をすれば「にとって」が可能であるのに対し、b の捉え方をすれば「にとって」は使えず、「に対して」を用いることになる。

従って、「失礼」の場合、本来は「にとって」を使うと不自然であるのだが、行為の受け手側からの視点に立って表現しやすい状況、条件を有している場合には、「にとって」「に対して」のいずれも使用可能になることがあると考える。

以上、「失礼」の例から、「にとって」は単純に使用可能かどうか判断できるというわけではなく、本来「にとって」との共起が成り立たない場合であっても、「にとって」で示される受け手の視点・立場からの表現が成立しやすい条件が整えば、許容される場合があることが示唆できた。

4. まとめ

「にとって」は日本語学習者が誤りやすい表現であり、その要因として「に対して」など混同しやすい表現があることや母語の影響などが指摘されている。本稿では「にとって」「に対して」の違いが分かりにくい「迷惑」「失礼」を例として取り上げ、「失礼」の場合については、「～から見て」という視点からの表現が許容できるかや文の構造によって、「にとって」を使用した表現の許容度が変わってくることを明らかにした。

注

注1 (砂の) 松本清張『砂の器』新潮社 1973 年

注2 『現代漢語』1993 の日本語翻訳版である。

用例出典

(日常の) 『日常生活の冒険』大江健三郎 新潮文庫

『大江健三郎作品集 日常生活的冒険』大江健三郎 作家出版社

参考文献

- (1) グループ・ジャマシイ編 (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- (2) グループ・ジャマシイ編 (2001) 『中文版日本語句型辞典』くろしお出版
- (3) 白川博之監修 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘 (2001) 『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- (4) 杉本武 (2006) 「複合格助詞「にとって」の意味と文法機能」『複合辞研究の現在』和泉書院
- (5) 張麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析－中国語話者の母語干渉 20 例－』スリーエーネットワーク
- (6) 北京大学中国語言文学系現代漢語教研室編 (松岡榮志・古川裕監訳) 『現代中国語総説』三省堂
- (7) 宮田公治 (2009) 「「にとって」の意味と構文的制約」日本語教育 141 号
- (8) 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型』アルク